

平城京跡に大規模水田
（へいけいしやうきやうあと たいきぼすいでん）

■奈良盆地北端部の沼の大きさについて
（ならぼんち きたたんぶの ぬまの おおきさについて）

察してみようや

古墳の分布図を見ると、佐保川と富雄川と

が接近して、あたりに一帯に古墳は無く

空白域となっている。（第478図参照）

＊この空白域に、広大な沼があつたの

ではなからうか。（要検討）

（大勢の）

（直後）当時は、扶余系殷民の子孫達か渡来した

常盤山などの高地で、住みにくい条件の底

地へ逃げたようである。（既述）

・当初の弥生人等が、奈良盆地北端部の沼

の北辺域に集落を作り、水田を経営していた

りかかも知れない。（写真図版699）

見つかつた水田跡（参照）

へ平城京跡で

（参照）

(ニ)

157頁

4.423^P-6/6

4424^P-5/6

4424^P-5/6

「奈良」「桜井」参照

現在「小さな池」が南北方向のほぼ一線上に点々と多数点在している。(昭和四十二年発行「国土地理院の五万分一地図

いたのかも知れない。(第480図へ佐保川参照)

あたりを北から南へ佐保川が流れて

言わすかなの(こと)からJR奈良駅の東側二〇〇

佐保川

は「陸地(低湿地)であつたようだ。

ともあれ「弥生時代初期当時」奈良盆地北端域

参照)

第479図へ静岡市登呂遺跡の水田推定復元図へ

図版701へ佐賀県唐津市「菜畑遺跡の水田跡」

める二例を掲載しておくことにしよう。(写真

・参考までに「扶余系殷民達の水田跡と思わ

の水田遺構だとは、考えにくうである。

・「合理的」だったとみられる「扶余系殷民達

・「多分」A・Bの延長上に集落があったのたう。

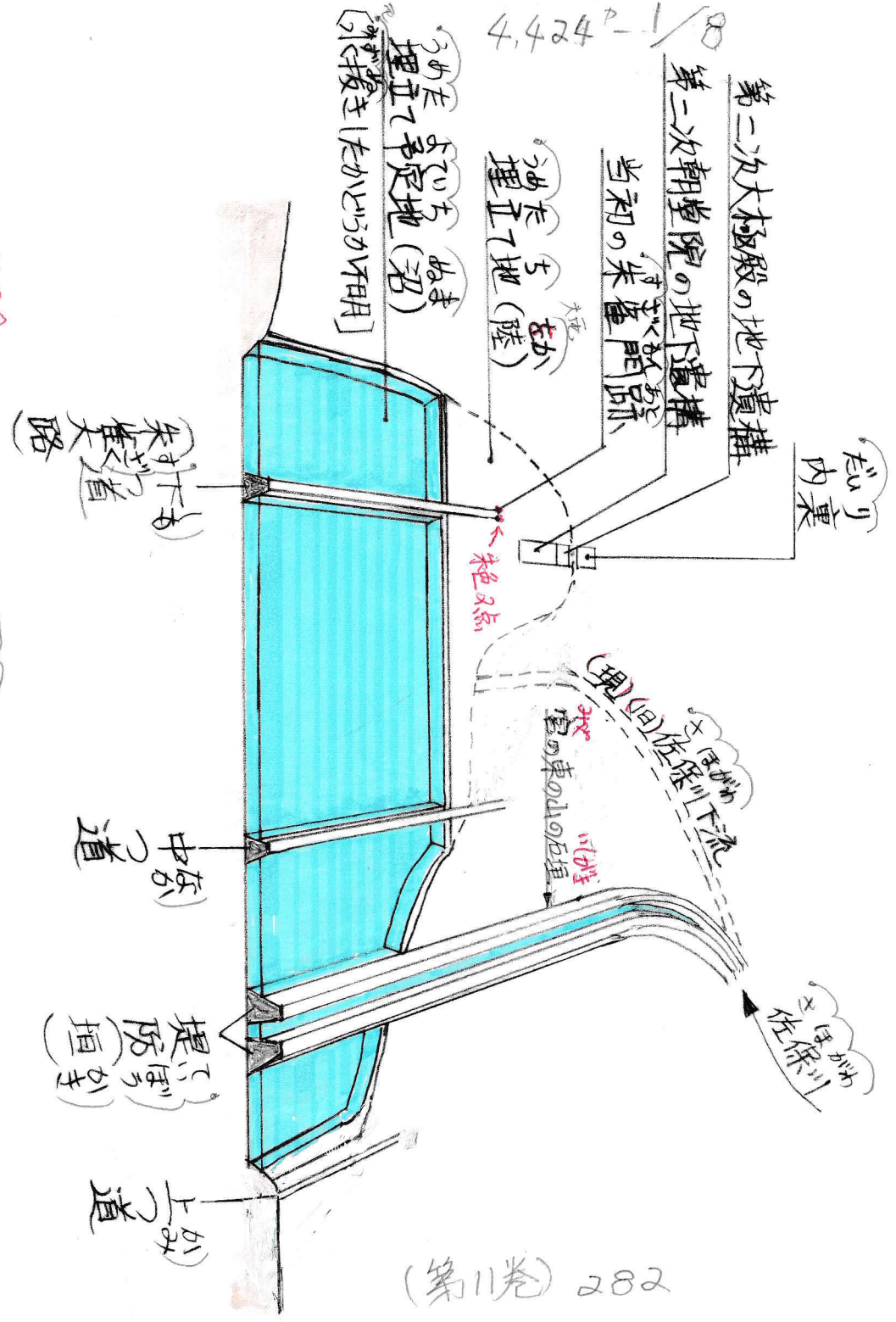
・「X」Y方向へ行くのは「難」く「ややこしい

・「規則性」が無く「未熟さ」が感じられる。

・この水田跡のAからBへ向かう時は「真直ぐ」走ら



- ・トレス17下さい。
- ・カラー(バタアミ点)。水底の線が見えるようにして下さい。
- ・右頁の上半分に大きく掲載下さい。



(第11巻) 282

140G
第477図 平城京造営工事想像図

130G
『奈良の都』虎尾修武 講談社、昭和43年12月15日発行、87, 89頁の図参照

12 天武天皇は『都城・宮室 必ず西 参造らむ』と詔された。(天武紀12年12月条)

9 天武天皇は、『仮代』大極殿・朝堂院を、765年の『あろろ』(第一巻末尾の年表参照)

・ガルーの網点を入れ
て下さい。

・左頁全面に、大主の掲載下さい。
(ゴザウワ)

・ヨゴレをトリ。

大阪府



4,42422/8

1404

1304

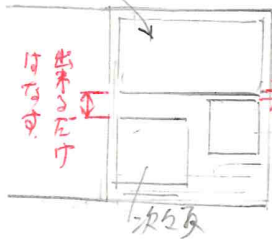
第478図 奈良盆地北端の古墳分布、および湿地帯想像図

昭和62年12月(2版10刷)発行

山崎出版社 23頁参照

B

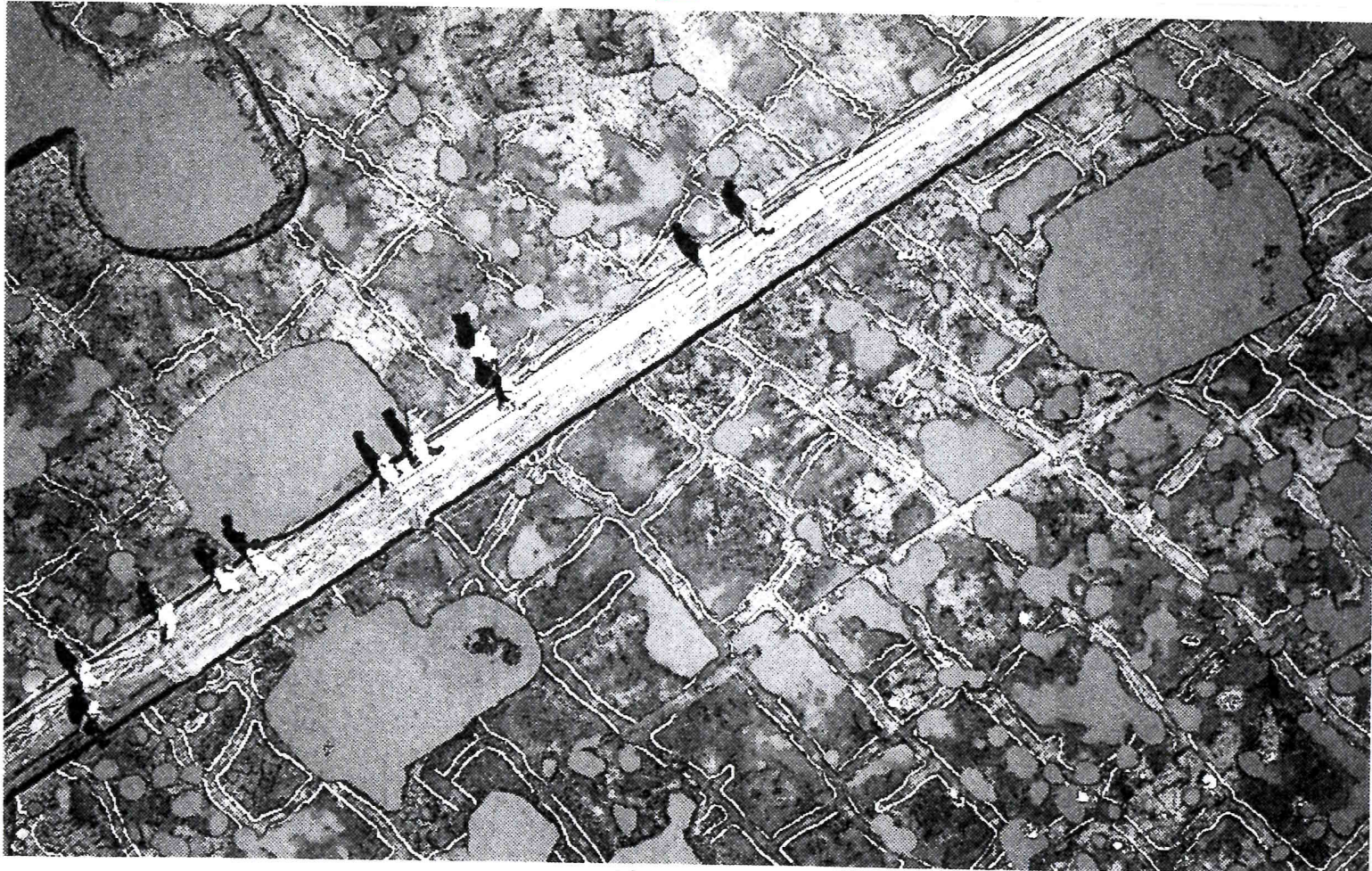
- ・右頁の上半分
- ・左右の大半はみ出し掲載下さい。



- ・上下を間違えないで下さい。

- ・A B X Y を入力して下さい。

X



Y

下

(ヘリから空撮)

1409

写真図版 699 平城京跡で見つかった水田跡

1309

『朝日新聞』平成28年6月24日付 <平城京跡に大規模水田跡 弥生初期の宮み裏付け> 参照

12
Q
G

A, B 方向の畦は、整然としているものの、X, Y 方向の畦に計画性は認められない。

H

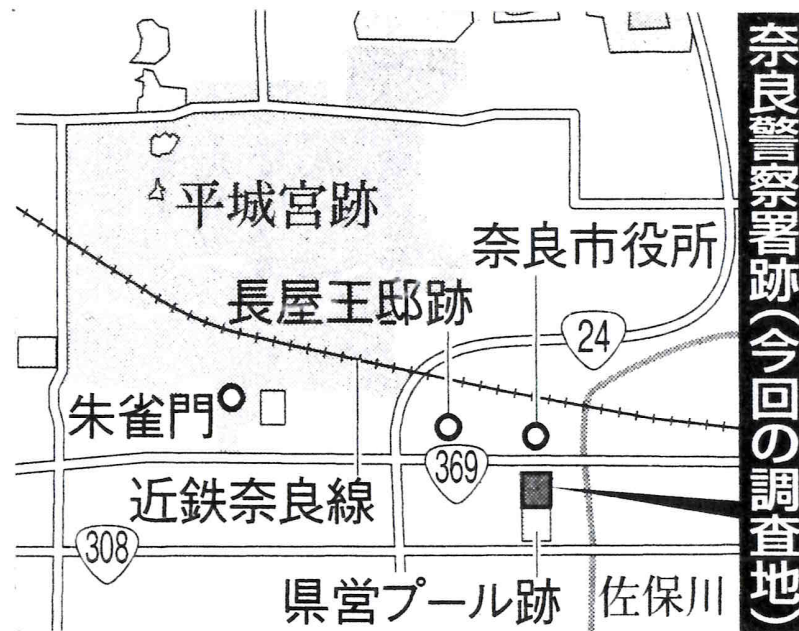
ともあれ、弥生初期当時、奈良盆地北端のこのあたりは、陸地(低湿地)であったということが分かる。

但し、縄文人・南河系系身人・扶余系般民・当初の弥生人の子孫。284^P 種族の水田なのかは、不明。(写真図版 参照)

4, 424^p-4/8

spile 4x23'

- ・右頁の右下(1/4頁)
- ・右下へ大きくはみ出して掲載下さい。



(*この図の下に、説明書き不要)

・カ-

・右側の左下
大主へお出し
掲載下さい。

・下上も間違え
ないで下さい。

4,424P-5/8



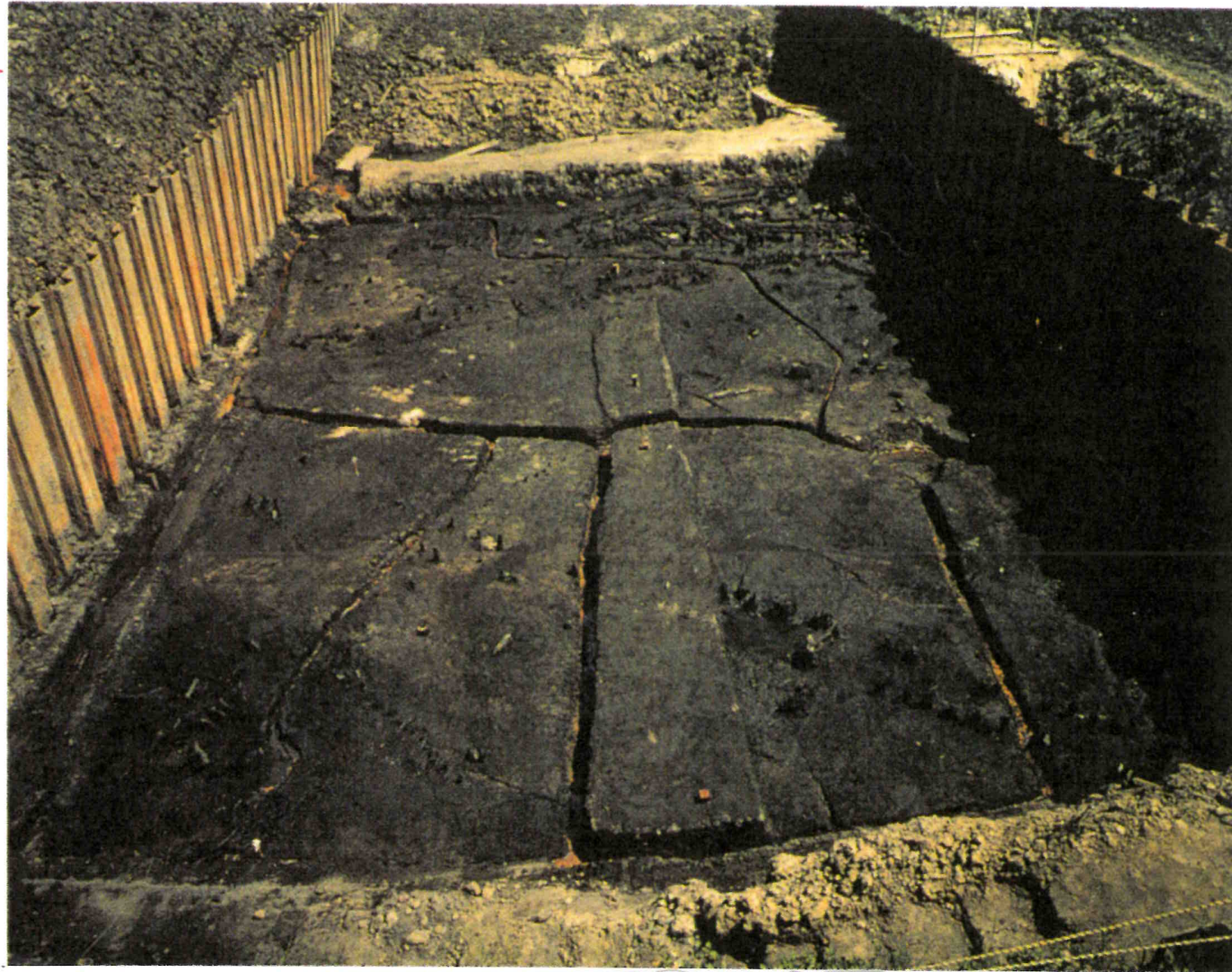
140g
130g
写真図版 700 奈良県御所市、弥生時代前期の水田跡

『朝日新聞』平成23年11月9日 <きつちり弥生人> 水田くつきり > 参照
120g
写真図版 699 と同様、縦方向の畦は整然と17m幅、横方向の畦に計画性は無い。
前々頁

4.424^r-6/8

・カラー

・左頁上半分に
上へ大きくはみ出し
掲載下さい。



↑カ
ット

↓カ
ット

順子さんから入手
した本

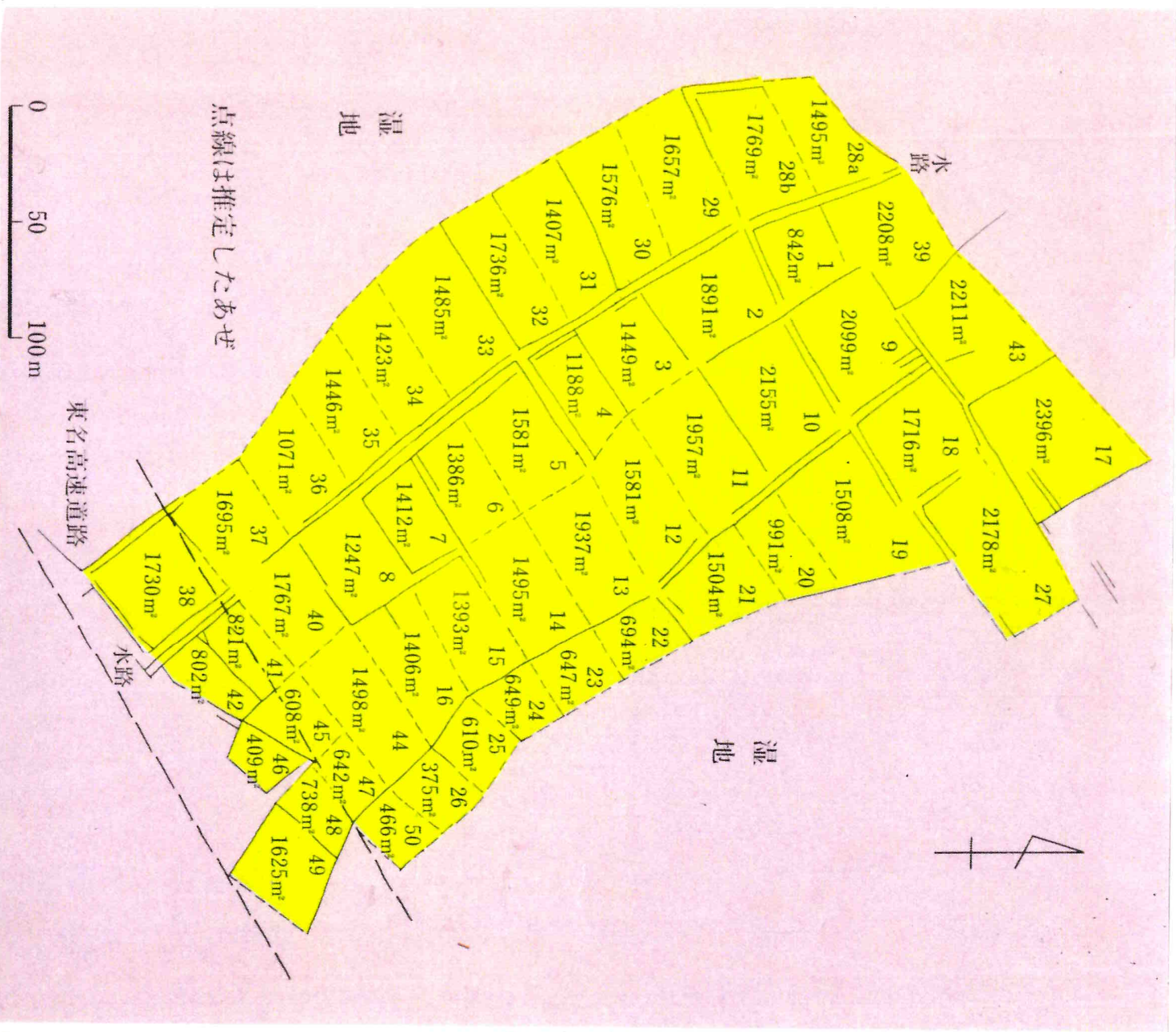
13QG

14QG 写真図版 701 佐賀県唐津市、葉畑遺跡の水田跡

『佐賀県の歴史』杉谷昭、山川出版社、2002年3月30日2刷発行、口絵参照
12QG ^{すいてX11ころ}わが国最古の水田遺構で、^{やまでら}縄文時代晩期の山ノ寺式土器、^{ゆす}夜臼式土器、^{RXかい}段階の矢板や杭列で補強、^{ほきょう}佐時、^{あせ}水路が調査された。
1枚の広さは、^{ふよ}18~19m²とせまい。^{いん}すぐ近くで、^{いん}集落跡もみつかった。^{いん}(※扶余系殷民の子孫達の遺構と思われる) 287^p

・13-1
 ・左頁下半分に
 下ろしたときはおみせ17掲載下さい。

4.424^P-7/8



288
 水田の復元

静岡市登呂遺跡の水田推定復元図

1304

1404

第479図

『特別史跡、登呂遺跡』静岡市登呂博物館、平成19年6月入
 13頁参照

12. 水田の南北をつらぬく一本の水路の幅は、約2m。その兩岸は、杭と矢板で固められ
 40cm幅の人が歩ける畦となっていた。

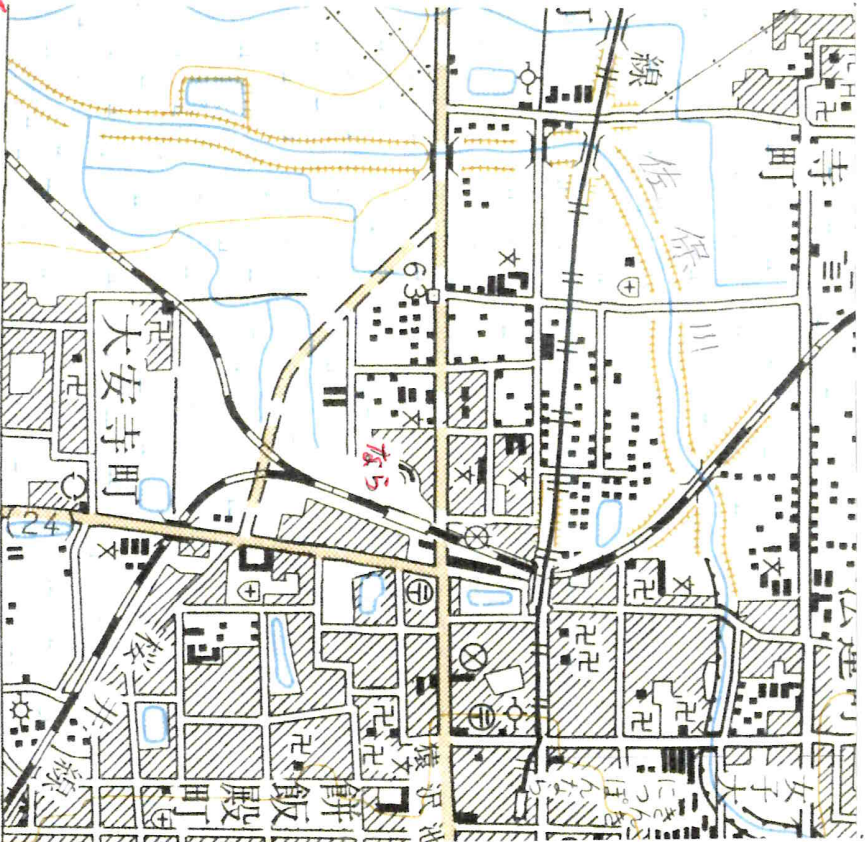
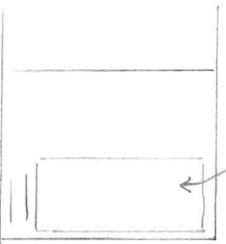
第2章『静岡市の登呂遺跡』において述べたように、持来系民の子孫達の遺構であつたと思わ
 れる。

・カー

・左側の左はし。

縦長に、限度一杯
はみだに掘削
下さい。

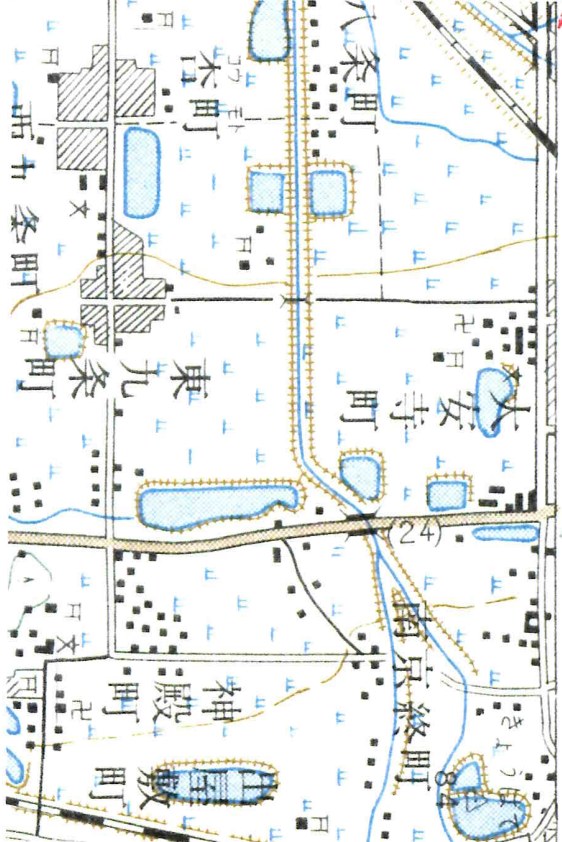
↓ 佐保川を、太いゴダウで入カ下さい。



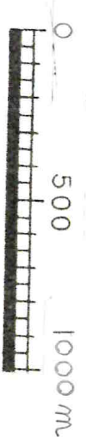
← "なら" を
太いゴダウで
下さい。

4.424^P - 8/8

↑ この終点上は (50分の1地図の線) までおさえて下さい。



↑ 横線を重ね
合わせて下さい。
* この横線を
基陣にし、
長方形にカット
して下さい。



↑ ほぼ一線上に多数の
小池が並んでいる。 } 11a4

第480図 佐保川、ほぼ一線上の小池

『50分の1地図』国土地理院、昭和42年発行。「奈良」「桜井」参照。
佐保川は「現在の流水に変わる以前」や東側を流れていたのだから、川に近接して『溜池』を作る場合も多い、ということがわかる。

4426°-1/2 11~12

深山谷 4414

4.425°-1/2

・これらの小池は、往古の佐保川の名残なの
かも知れない。(第480図参照)

藤原京城の造成

もつとも、
奈良盆地北端の湿原を埋め立てるのであ
れば、その近傍の山々からとれる石を用い
ばよさそうなものなのに、
何故、石上山、あるいは遙か南の香山の西
から石を運んでこなければならなかったのだらう

うか

という疑問が沸く。

①新城(後の平城京)の北城の景観を壊した

くなかったのだらうか。

②それとも、奈良盆地の東の縁の、石山山

ら香具山に至る一帯の小さな山々を平坦にし

たかったのであろうか。

③いや、すでに述べた通り、香山の西方、つまり大

和三山で囲まれている広い土地に、大倭国(肥後

国)の小墾田宮に相当する、日藤原京を造営

(既述) 要。前「すてたばい」
18分 通「」

4,425^p-2/2

紀F343^p ヤ×ル
ヤ×コ341!

第四の山を壊して

するたため、大規模な整地を行ない
削り取った大量の石や土を、二百艘の船で平城
の地へ運んだのではなからうかと想像され
る。

なお、ほ人の参考までに述べると、香明紀

六年五月条に、

石上池の辺に、須彌山を作る。高き廟塔

(寺院の塔)の如し。云々

と記されているが、ここにいう石上池は、奈

良県明日香村にあつたろうか、という。(「日

本書紀」(F)井上光貞、中央公論社、二五五頁

参照)

*

50分の地図
④4418

天和

△多武奉

ニ

4426-1/2

103

427④
④4421-2/2 65m
紀下234'15m
紀下328'末25m

「とこで」④4408-3/2
④4457

人々の不満

先に引用したとおり ↑↑ 齊明紀二年是

歳条に

西より、石上山に至る。舟二百隻を以て、香山

の西より、石上山に至る。舟二百隻を以て、香山

石上山の石を載みて、流の順に控引き、宮の

東の山に石を累ねて垣とす。云々

垣とす。云々

奈良盆地南境あたりに

の遺構が、現在迄も残っている筈であらうと思

われる。＊しかし、それほど大々的な石垣は見当ら

ないようだが

なお、↑上文の田身嶺に周垣を作ったこと

の重出か」ともいう。(↑日本書紀(下)日本

古典天学大系、岩波書店、三二九頁注三三)

「か」なから、わがわがのよう長大な

溝を掘り、北の方の石上山の石を香山の西へ

船で運び

その石を、香山の「東南」に聳える田身嶺

④4425
1/2 18m

(すべて述べた通り)

(多武峯)の頂上あたりへ運び上げて、冠状
の周垣を作った、などとは考えにくいように
思われる。
■石上山の石が香山の西へ運ばれた、という
意味でなく、
石上山の石も、香山の西の石も、溝に落
かべた船によって、宮(平城宮)の東へ運
ばれていったのであろう。
と推測される。(第477回へ佐保川の堤防参照)
■自身(多武峯)の遙か西方約四回、
鳥板蓋宮伝承地の東北方すべの所、奈良県高市
郡明日香村岡で、謎の石造物、酒船石が置
かれてゐる山の中腹から、飛鳥時代の石垣が
出土したといひ、
条の、
日新聞、平成四年五月二日付、同四年七月
三十一日付、同七年六月八日付へ丘全体に飛鳥
の石垣(参照)
・そして近年、人頭大の石を、
遺跡から、亀形の石が見出し、注
目を集めてゐる。(朝日新聞、平成十二年

4,427^P- $\frac{3}{2}$

考えにくいよう
更なる前2行
④4421^P- $\frac{3}{2}$

紀下328¹
後岡本宮
④4416^P

石敷遺構 軸H12.225
S-file 4421

二月二十三日付、他参照

・ ーか、この石垣（石敷遺構）が、

宮（後飛鳥岡本宮）の東の山に石を累ね

て垣とす

と記されていゝるものだと、連断図できない。

・ この石垣を作るためだけのために、

香山の西より、石上山に至る渠を穿つ

た

長大な

とは考えにくい

・ さらに、

石垣が築かれていゝるこの山（飛鳥板蓋宮

伝承地の東北方すゑの所にある山）は、香

具山の西でなく、――香山の真南約一

五時に位置していゝる

のである。

納得しにくいことである。

*

南北に連なる長い長い運河、溝

さへ二百隻の船が整然と往き来したものであろう

なろうか。右側通行あるいは左側通行で

たぶん、左側の堤防を作った後

まんま 満載 元2/00P
満杯に ⑦ 4423-1/2

せき 隻 1235P
状

65Pゆえ 空刊 467P

4,428P

ニと

へ香山の西（大和三山の間）一帯の石を満載した船は数珠つなぎ状になつて北へ向かい、大湿原の水の中へ運んできた石や土を投入し、終えた空船は、再び南下し、長大な溝を通つて香山の西へ急いだのだ。うう、と想像される。

こうして、上中下三道あたりには、一大湿地帯は、北の端から少くづつ、丘となつて、たに違ひない。

だが、人々の不満は大きかった。

「どうしてこんなに広い葦の原を埋め立てて、宮を造らなければならぬのだ。一かち、あんなに長い溝を掘って、遠い香山の西から石を運んでくるなんて、どう考えたつてもじやない。」

この大土木工事の真の意味を知らない者達には、もちろんのくろくたえその訣を知る者達

「ええ、首を横に振り、誇つたことだろう。前記述のとおり、左のように、天明紀二年是歳条に

山の末 (山頂) の頂の左
紀下 328° 経 36° 緯 45° 2'
大和 96 号 338° 経 行

4.429P

きょうま 狂気 566°
4.421° 17 分 こと

山の末 (山頂) の頂の左
紀下 329° 経 36° 緯 45° 2'
大和 96 号 338° 経 行

こう記されてゐる。
時の人の謗りて曰はく、
夫を損し費すこと、三萬餘。宮材爛れ、山椒 (山頂) 山頂の意
埋小たりと。又、謗りて曰はく、石
の山が丘を作る。作る随に自づからに破れなむ
と。いふ。若しは未だ成らざる時に據りて、此
の謗を作せるか。
も、かいたら下。当時の人々は下。言つたので
はなからうか。
常軌を逸した狂心の涸木。
狂気やみた渠よ。
この狂心の渠の工事に費さぬ人夫は三
万余。宮の垣を造る工事に費さぬ人夫は七
万余。
千人なことをするから、天罰をきめん、
大倭国の小堀田宮の材は腐り、倭国の飛鳥板
蓋宮の材は焼け爛れ、山椒 (山頂) 山頂の意
よ。
山の西にあつたと思ひゆる小山の山頂の意味

かゝは、削り取られて、水もあろうに、
の底に埋めてしまった。何か悪い事でもな
ければよいかし
「それにしても、無駄なことだ。石の山が
丘を作る。しかし作るは一からひとりてに
あつて、もうだうう」
■ 湿原の埋め立てが始まったばかりの頃、人
々は、~~いかに~~ 激しく、悪い様に非難していた。
■ しかし工事が進んで、次第次第に広大な埋め
立て地が出来てきた時、その確固たる現実の
力加、人々の口を封じてしまったに相違ない。
● やがて、そのような事を言う者など、誰も
いなくなつてしまったようである。
*
■ なるほど、香山の西から石上山に至る渠の
とを、斉明朝当時の人々は、誇つて、
の渠と称したかも知れない。
■ しかしはたして、本当に、この長大な溝は
全く無意味に造られた、狂心の渠であつた
のたううか。
■ 現在、通常、

一面的 吟味
独断的 非论理的
~~批判的~~

無批判的

興
味
吹奏4行

正

さらにもまた、中大兄や、孝徳天皇の白雉五
年(六五四)に紫冠を賜って大臣となった中
臣鎌足連もそばにつりている。このころに
へ齊明天皇が、全御自身の興味だけのた
めに、十万人余りの人夫を必要とする狂乱的
な土木工事を行なわれた。な
どと、いふことは有り得ない。
*何か大切なことを、従来見落してきたよう
に思われる。
■恐らく、多数の古墳の造営が終ったいま、
齊明天皇は、
へ新城(後の平城京)を造る為には、先ず
湿地帯を埋め立てなければならぬ。この一
大湿原を埋め、造営することこそ、自ら
の任務である。✓
とお考えになり、人々の諍りの言葉にもあえ
耐え、
大土木工事に取り組んでゆかれたの
であらう、と拝察される。

米

うき 11そのかみの溝 紀上426 履中4年 233

新南の板き青 3/5 麦アセニ 新南の板き青 4434-16 1997

4,432 P-1/2

改行

次頁が

「石上溝」の遺構

↑↑↑↑↑ 近年、石上神宮の西約三百メートル（天

理）市中心部から見て東南の平地部の松え内

町で、「石上溝」の遺構とみられる、渾河跡が

見出しされた。（写真図版 702 参照）

和五十五年三月七日付、参照

見つけた渾河跡は、北東から南西向きで

幅が上部で十メートル、底で六メートルほど。深さ

は三メートル。長さ約百メートルを確認しているが、

総延長は香具山のふもとまで十数メートルに達する

大規模なもの、という見方もできている。

これは四年前（昭和五十一年）、この現場

の北東約百メートルで、ほぼ同じ形の大溝が長さ約

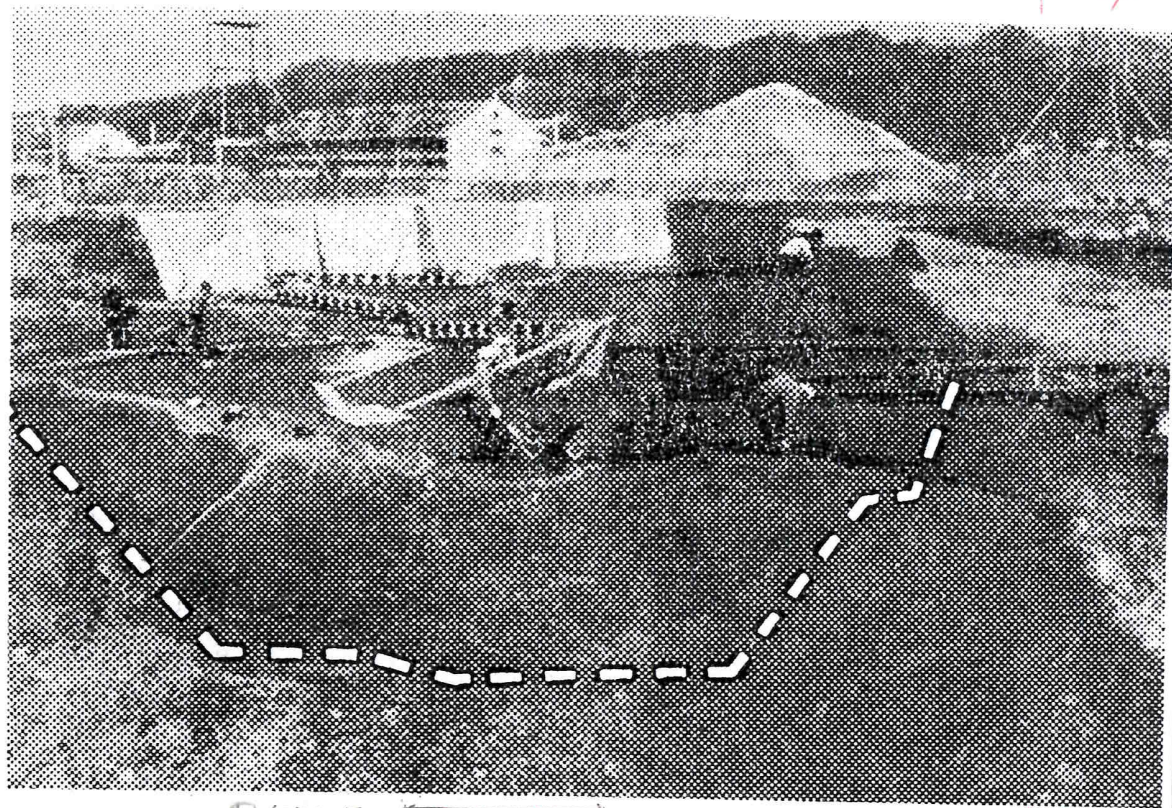
二十メートル分調査された。もともとの時は、何か分から

なかった。

・右頁の上半分、左右ハ大きくはみ出し掲載下さい。

4.432^p-2/2

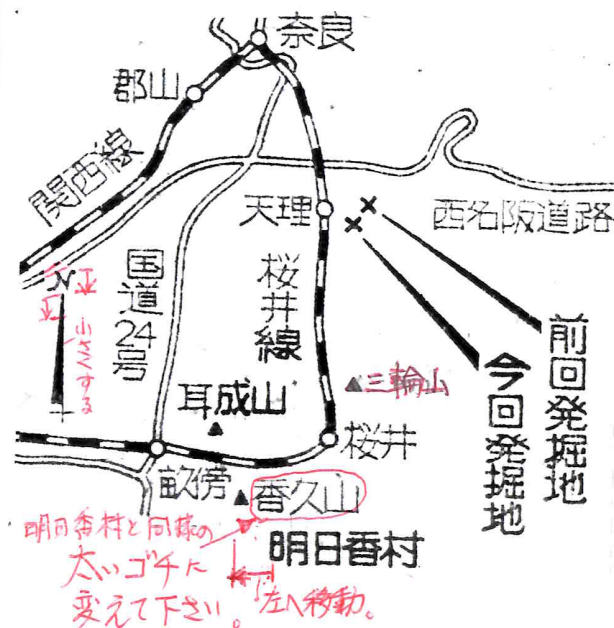
→ byt



(かすれている)

・きれいなゴキックで入力下さい。

・トレースして下さい。



14GG 写真版 702 『石上溝』とみられる遺構の断面
 13GG 『朝日新聞』昭和55年(1980)3月7日付 <日本書紀の石上溝か>参照

山内紀嗣所調査団員は、
「堀り方や丘を横切って掘って掘る状況は、自然の川とは考えらるす、運河に間違いな
い。日本書紀の石上蒲は、こゝまで桜井市多
武峯付近とする説があったが、名前通り石上
に近いところにあつたことがはつきりした
運河はさらに市街地へ発掘現場の西北へ天理
市街地のことであろうか」の方へ伸びている
ようだ

水
て
い
る

発掘 (はくくつ) 担当 (たんとう) 者は 下

置田雅昭

[illegible]

4.433^P - 2/2

点検
溝ざらい

④233^P へくぬくぬと逢うように17

OK

石上神宮の西方を通り、さらに曲りくぬりな
から北上を続けていったように想像される。
*もつとも「自然の川でなない」運河に洪
水調節型が採用されているというのは「理
解にくい。
*あるいは「~~（ここを）~~」
つて歩行し易くする為「狭い平坦部を設けた
のではなからうか。（要検討）

★ 手持ちの本「戦後50年 橋幅上部で10~15メートル 4432 22 1/2 10F
 古代史研究総まとめ」 4434 - 1/6
 112~ 4頁を見ること!!

経向遺跡 新Y(2)-198 経向
 (2763²-2/3 ~ 3/3 図)

水	製	護	あ	か	幅	版	に	跡	第	遺	跡	跡	奈良	経	ま
橋	矢	岸	ッ	「	「	703%	よ	の	348	跡	が	で	良	向	ま
遺	板	施	た	人	幅	704%	り	西	図	検	検	東	県	遺	ま
構	が	設	で	「	五	参	「	端	へ	出	出	西	桜	跡	ま
も	打	と		字	ト	照	破	部	経	さ	さ	方	井	「	ま
あ	ち	ー		形	下	「	壊	は	向	れ	れ	向	市	で	ま
っ	込	て		に	深	「	さ	「	遺	た	た	四	の	見	ま
た	ま	下		交	さ	「	れ	「	跡	「	「	棟	経	い	ま
で	小	お		差	一	「	「	「	「	「	「	が	向	出	ま
	て	ひ		「	二	「	「	「	「	「	「	整	遺	さ	ま
	い	た		「	「	「	「	「	「	「	「	然	跡	れ	ま
	た	だ		「	「	「	「	「	「	「	「	と	「	た	ま
	で	「		「	「	「	「	「	「	「	「	並	三	大	ま
	汚	「		「	「	「	「	「	「	「	「	ら	輪	水	ま
	泥	「		「	「	「	「	「	「	「	「	ふ	山	路	ま
	沈	「		「	「	「	「	「	「	「	「	建	西	「	ま
	澱	「		「	「	「	「	「	「	「	「	物	麓	「	ま
	用	「		「	「	「	「	「	「	「	「	の	「	「	ま
	の	「		「	「	「	「	「	「	「	「	遺	「	「	ま
	集	「		「	「	「	「	「	「	「	「	「	「	「	ま

前頁15行

トV

調査された長さは二百メートルにすぎないが、
 指定二千六百メートルに及ぶ。
 構築に多大の労働力を要したこの大水路の
 用途については、農業用水路のほか、物資運
 搬用の運河とみる説もある。
 という。戦後五十年、古代史発掘総まとめ
 リ、アサヒグラフ別冊「朝日新聞社」一九九
 六年四月一日号「一三頁参照」
 ■農民等が「自発的」にこんなにも大規模な
 溝を掘ったとは考えにくい。
 定かでないものの、
 へ縄文遺跡で見いだされた大水路は「青明
 朝」に作られた。狂心渠（石上溝の延長部分）
 の一部なので、はなからうか✓
 と思われ、
 洪水による埋没しないように、東の山の裾沿いの溝とされたの
 幅の狭い平坦地をもつ。洪水調節型口であつ
 たのかどうかについては、分からな
 日井堰は「香山の西の石や土を平城へ運
 び、終わった後、灌漑用として設けられ
 た可能性がある。」

・カ-

・右頁左上

1/4に、左上へ

大きくはみ出た

掲載下さい。

4,434^p - 3/6



千枝の木

307

120g

130g

140g

思真図版 703 経白遺跡大水路の護岸用矢板列

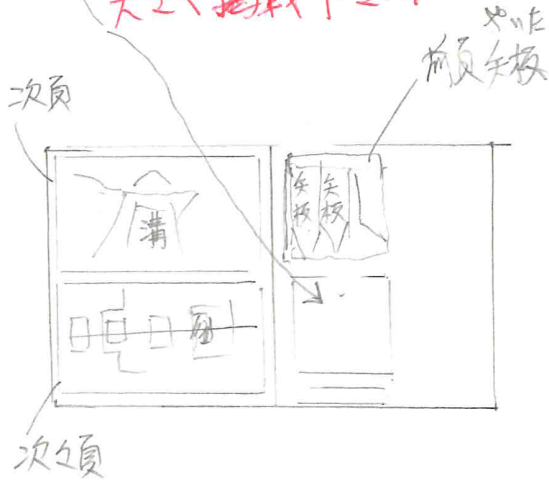
『戦後50年古代史と振興』朝日新聞社、1996年4月1日発行[81冊]、113頁参照。
・残存長さ70~140cm、幅12~48cmのヒキ材が並んでいた。

4,434^P-4/6

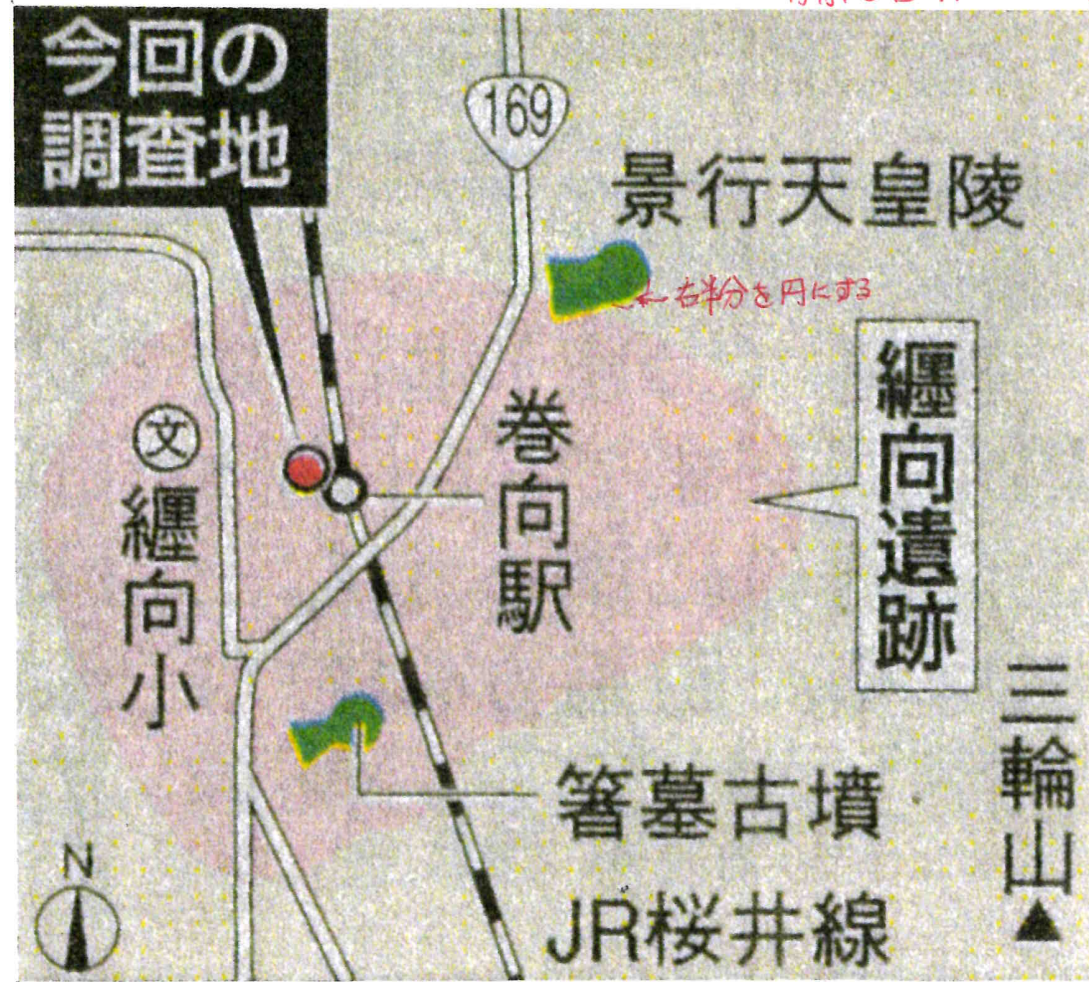
- ・きれいな活字(ゴシック)にお願ひします。
- ・中央部分を明るいピンクにして下さい。
- ・背景を白くしておいて下さい。

・カラー

・右頁の左下(1/4頁)に大きく掲載下さい。



・トレスして下さい。



13QG 14QG 第481図 まきむく 巻向遺跡近傍図

『朝日新聞』平成21年(2009)11月11日付、〈奈良・纏向遺跡〉参照

4,434^P - 5/6

→ カット

- ・カラー
- ・左頁上半分に、
限度一杯 ↑
はみ出して
大きく掲載
ください。



カット ↑

- ・朝日新聞
「6世紀の謎」
という6世紀の
土器が出土した
・香明天皇内遷
655~661

地下329^{cm}

さくさい まきむく

→

大沢れい子の日記 第315頁

13QG

14QG 写真図版 704 奈良県桜井市纏向遺跡で発掘された大水路 (狂心渠の底部分か)

『戦後50年古代史発掘総まとめ』朝日新聞社、1996年4月1日発行[別冊]、113頁参照。

古くは中版
手持ちの本

幅5m 深さ1.2mの大水路で 調査された長さは200m余

構築に大変な労力を要したこの大水路の用途については、物資運搬用の運河とみる説がある。定期的に溝浚いを行っていたのだろう。

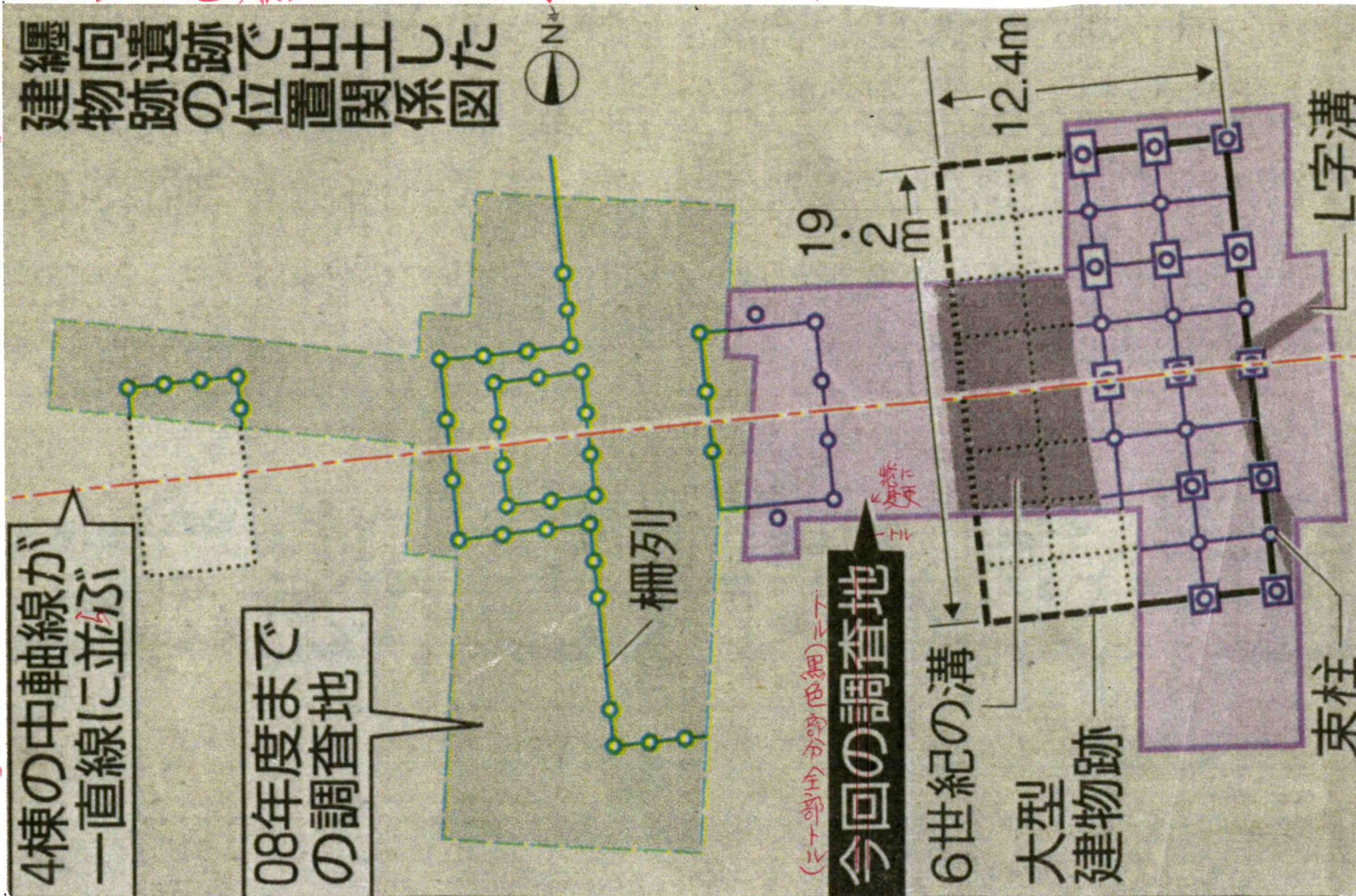
309^P

纏向遺跡で出土した
建物跡の位置関係図

N 4,434P-6/6 19.2m 12.4m

新刊(2) 1986
2762P-3

纏向遺跡で出土した 建物跡の位置関係図



カラー
文字の向きを
朱筆のように
訂正して下さい。

明るい色に
しておいて下さい。

左頁下半分に
掲載下さい。

トレスをお願い
します。

4棟の中軸線が
一直線に並び
ぶが

ゴ4
14QG

第482図 纏向遺跡で見い出された
大水路

『朝日新聞』平成21年(2009)11月11日付
「奈良・纏向遺跡」参照

13QG

310

柵列

黒色部分全部
紫色を加えて
下さい。文字
トレス。

6世紀の溝
6世紀の溝内へ
6世紀の土器が
入り込んだの
だろう

大型
建物跡

L
字溝

東柱

4,435-1/3

Sfile 4438
42771a.

50分の1地図 香野

香山以南の大水路

香山の真南約一七時に位置する日輪寺

のすぐ東側に大略南北方向に連なる幅十

の水路があったようだが(写真版705参照)

水路の跡は地表から約二メートル掘り下げた

ところで見つけたが幅約十メートル長さ五メートルの

水路跡を確認した。深さ一メートル。

底にあった土器は七世紀中ごろのもの

だった。

水路跡の西端には約四十センチ四方の柱穴が

約一八センチ間隔で南北に三つ並らび柱の一

部も残っていた。水路沿いに堀があるいは転

落防止用の柵が設けられていたのだろうか。

東端は七世紀後半と八世紀前半に改修さ

れたらしく、その時代の人頭大の石が

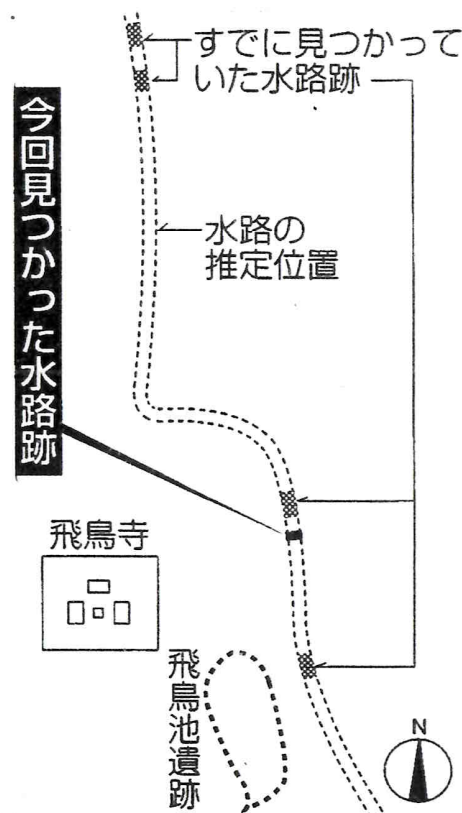
積み重ねていた。

以前の調査で、南へ約二百メートルと、北へ約六

- ・頁の上半分。
- ・左右へ大きくはみ出して掲載下さい。

4.435^P - 2/3

5 file 4438^P



1304 1404 写真図版 705 香山の南に、幅10^{ハバ}の水路跡
 『朝日新聞』平成11年11月19日付、奈良・明日香、幅10^{ハバ}の水路跡、参照
 1204 手前(東側)に、護岸用とみられる人頭大の石積みが見える

百廿など四ヶ所で同様の水路跡が見つかって
おり、延長は一基以上あったようだ。
近づくにある飛鳥池遺跡で作られた日本最古の
通貨とみられる富本銭や生活物資などを運
ぶための運河として使われたらしい。
という、朝日新聞に平成十一年十一月十
九日付へ幅10分の水路跡を参照。
飛鳥寺のすぐ西側を北流している飛鳥川は
なとの自然の河川は「急流域」などがあり、ま
た濁水期に運行出来なくなる恐れもある。
香山西麓から南方へ延ばされたのかも知れな
い。
■ 瀬・生活物資の輸送などのほか「時には
平城京から飛鳥へ、あるいは飛鳥か
ら平城京へ向かう大宮人等の遊興（船遊び）
のため水路として用いられたのではなから
うか。

*

4,436^P-1/3

429.313
千二九一た

2947^P1/4
2946^P8/13

巻
42^P

版
539
八竜山石切場(参照)

正面中(ほうめんちゅうしん)よりや下に(した)縦(たて)三十(さんじゅう)横(よこ)三十(さんじゅう)七(しち)号(ごう)ほどの(ほど)長(なが)方形(かうけい)の(の)穴(あな)が(が)前後(ぜんご)に(に)貫通(くわんつう)して(して)おり(おり)その(その)穴(あな)から(から)垂直(すいじく)に(に)上(うへ)へ(へ)向(む)か(か)って(って)直径(ちゆうけい)三十(さんじゅう)四(し)号(ごう)前後(ぜんご)の(の)丸(まる)い(い)穴(あな)が(が)きれ(きれ)いに(に)刻(く)り(り)抜(ぬ)か(か)れて(れて)い(い)る(る)また(また)下(した)各(かく)側面(そくめん)に(に)は(は)上(うへ)に(に)少(すこ)し(し)ず(ず)つ(つ)窄(すま)まる(まる)か(か)ち(ち)で(で)平(へい)面(めん)や(や)緩(ゆる)い(い)カーブ(かーぶ)が(が)五(ご)六(ろく)段(だん)以(い)上(じょう)厚(こう)真(ま)図(ず)版(ばん)の(の)寸法(すんぽう)は(は)幅(はば)百(ひゃく)二(に)十(じゅう)セ(セ)ン(ン)奥(おく)行(ぎやう)き(き)百(ひゃく)九(く)セ(セ)ン(ン)高(たか)さ(さ)百(ひゃく)五(ご)セ(セ)ン(ン)ほ(ほ)ど(ど)で(で)下(した)も(も)と(と)は(は)立(りつ)方(ほう)体(たい)だ(だ)った(った)も(も)の(の)か(か)や(や)斜(なな)め(め)に(に)割(わ)れ(れ)下(した)三(さん)分(ぶん)の(の)一(いち)余(あ)り(り)が(が)失(うしな)な(な)わ(わ)れ(れ)て(て)

大和(やまと)三(さん)山(さん)の(の)一(いち)つ(つ)で(で)耳(みみ)成(なり)山(やま)の(の)北(きた)西(せい)約(やく)六(ろく)百(ひゃく)が(が)に(に)ある(ある)市(いち)杵(き)鳥(とり)神(かみ)社(しゃ)の(の)境(けい)内(ない)に(に)下(した)飛(あす)鳥(か)時(じ)代(だい)の(の)も(も)の(の)と(と)み(み)ら(ら)れ(れ)る(る)水(すい)門(もん)そ(そ)っ(っ)く(く)り(り)の(の)石(せき)造(ぞう)物(ぶつ)が(が)置(お)か(か)れ(れ)て(て)る(る)で(で)(厚(こう)真(ま)図(ず)版(ばん)706(ななひゃくろくにじゅうろく)参(さん)照(しやう))石(いし)の(の)寸法(すんぽう)は(は)幅(はば)百(ひゃく)二(に)十(じゅう)セ(セ)ン(ン)奥(おく)行(ぎやう)き(き)百(ひゃく)九(く)セ(セ)ン(ン)高(たか)さ(さ)百(ひゃく)五(ご)セ(セ)ン(ン)ほ(ほ)ど(ど)で(で)下(した)も(も)と(と)は(は)立(りつ)方(ほう)体(たい)だ(だ)った(った)も(も)の(の)か(か)や(や)斜(なな)め(め)に(に)割(わ)れ(れ)下(した)三(さん)分(ぶん)の(の)一(いち)余(あ)り(り)が(が)失(うしな)な(な)わ(わ)れ(れ)て(て)

狂(くる)心(しん)渠(き)の(の)水(すい)門(もん)と(と)み(み)ら(ら)れ(れ)る(る)石(せき)造(ぞう)物(ぶつ)

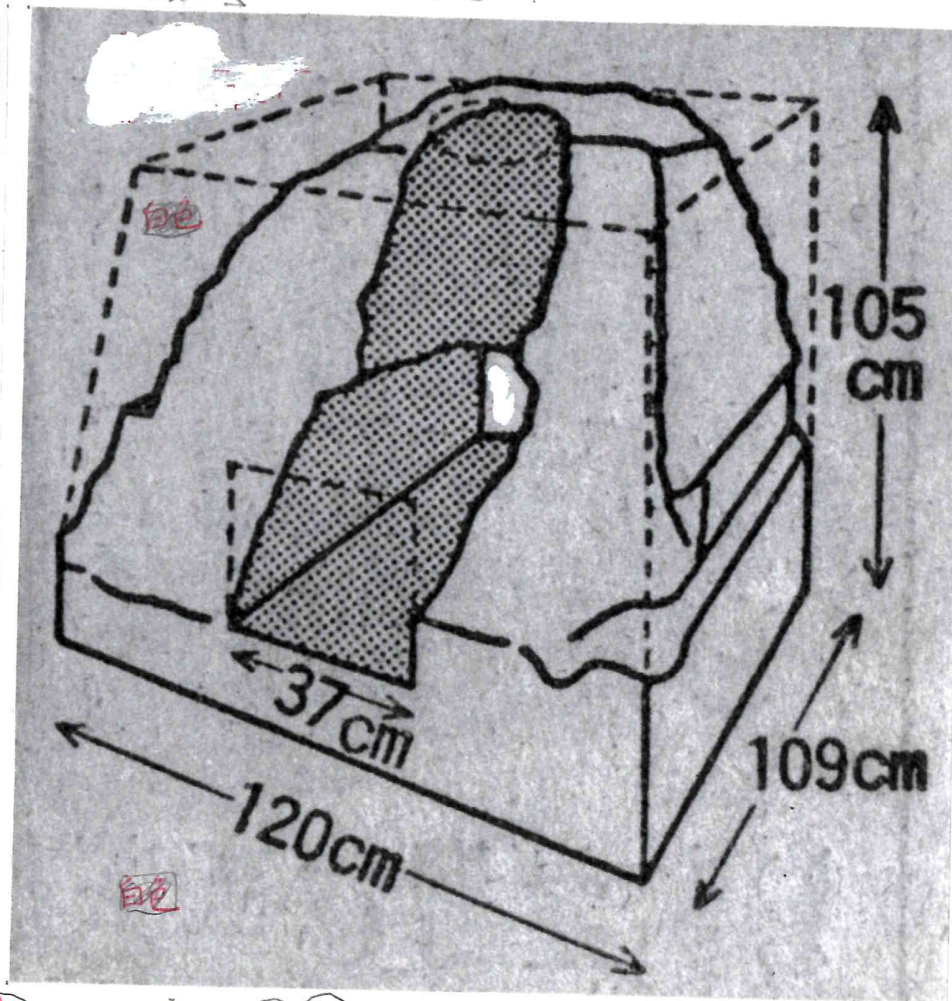
- ・ 頁の上半分.
- ・ 左右の大きさはみ出し掲載下さい.

4,436^P - 3/3

トリ
・ 背景を白に下さい.
・ 石の色はヌヌ(グレー)



グレーに下さい.



コナ
14GG

13GG

写真図版 706 「狂心渠の水門」とみられる石造物 および見取図

『朝日新聞』昭和59年(1984)7月2日付「狂心渠の水門か」参照

3/5

トリ
※点線の形はたゞと推定される
11GG 右つめ

1セキ
四州石関 由1305² 3/4 4巻580頁

8 IF 9/27
9/27

4.436 P- 3/3
水門 44362/3 659

H29 3.13
42791左 ⑥

この石造物の外面(に彫られている)
は、檜原市にある菖蒲池古墳の石棺(竜山石)
製と、そっくりだ。
外面装飾から見て、特別な意味のある水門
の可能性が強い。
ただ、轆轤の軸受けの可能性もある。
狂心渠のものと断定するには、用途の確定
出土場所やその状況、遺構の調査など、今後
詰めて行かねばならない点も多い。
という。↑↑↑↑↑ (朝日新聞) 昭和五
十九年七月二日付へ、狂心渠の水門か、参
照。
このような水門によつて、運河内の水面を
一定に係ち、船の航行の便宜を図つていたの
だろうか。(「広辞苑」へ「閘門」へ「閘門運河」
参照)

こと

紀下328^新

4,437^P

天つき
改行

5 Jul 4437^P

改行

号くよ
墨書 2031^P

香山西方の大溝・墨書土器

香山

(香久山)

の西側にあたる

藤原京跡左

京六条三坊地区を

発掘したところ、

藤原京時

代の大溝(幅四一六)

深さ一・二

長さ

五十以上)があった

その

溝の中

から、香山と書か

れた土器など、奈良時

代中ごろから後半にかけての墨書土器約四十

点が見つかつた、という。

朝日新聞

写真四版

香山と墨書されて

和六十一年四月十九日付参照

もつとも、この藤原京内の大溝が、有明紀

二年是歳条に、

香山

の西より、

石上山に至る

と記されている溝のことなのかどうかは、ま

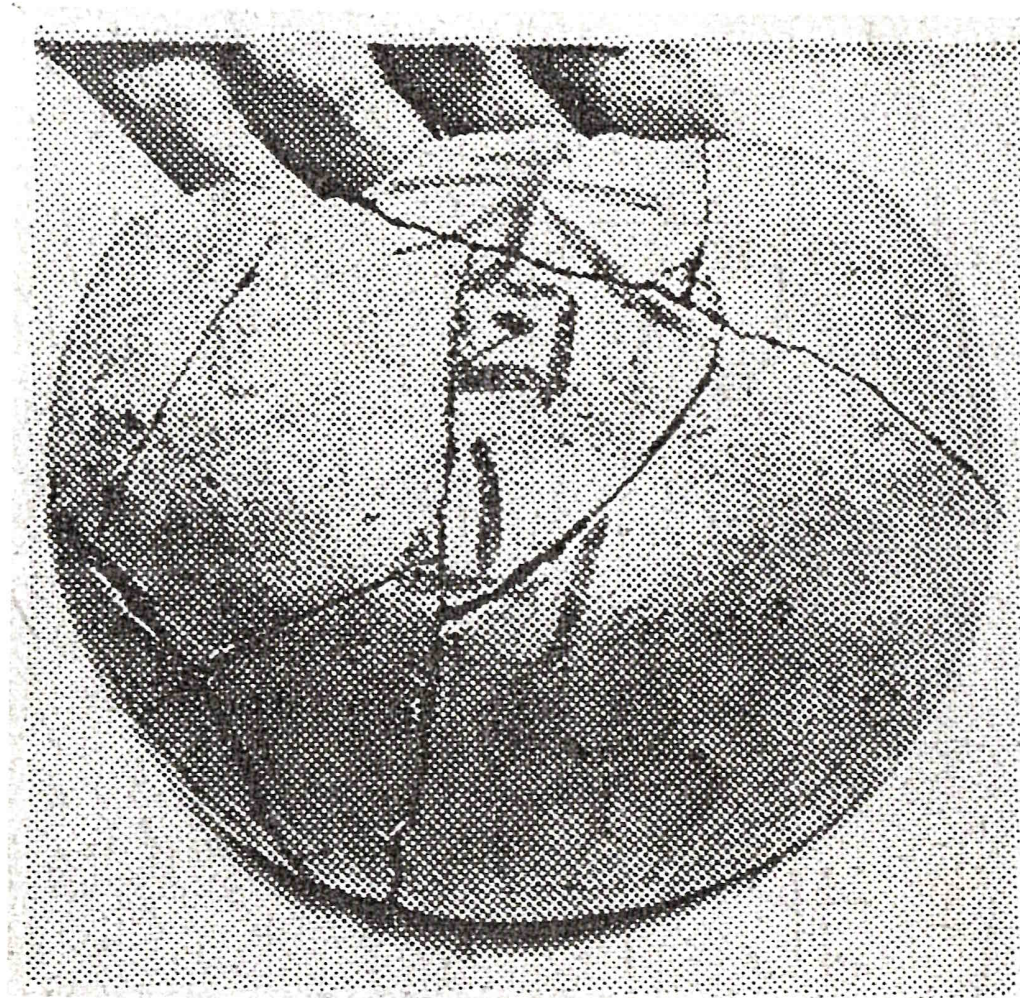
だ分らない

*

こと

4,438^P

- ・ 頁の上(半頁)に
はみ出し大きく掲載
下さい。
- ・ 出来るだけ明るく、
文字がくっきり見える
ようにお願いします。



13Q G

14Q G 写真図版 707 香山と墨書されている土器

『朝日新聞』昭和61年4月19日付<「香山」と墨書の土器>参照。

は
か
ぐ
や
ま

4- 香久山のふもと、藤原京跡左京六条三坊地区の大溝内から出土した。

修後名1054^p

紀328^p 注25
333^p 334^p 11行

後飛鳥岡本宮
4416

4439^p

4415^p 元年是の冬に炎上
紀下
後岡本宮の遷都 4416^p

紀下329^p 注31
古太子吉野へ入った

紀下329^p 4行
注記

吉野宮造營・岡本宮の火災

○齊明紀二年是歲条に、こう記されている。

「吉野宮を作る」

○吉野宮の所在については、奈良県吉野郡吉

野町の宮境の辺とする説が有力である。古く

から離宮があつた。この年に、増築もくは

改築されたのであろう。

＊

また、是の歲に、齊明天皇が都としておら

れた岡本宮に火災がおこつたという。(紀)

・昨年の齊明元年に板蓋宮が炎上し、さらに

今年の齊明二年には岡本宮が焼けたのである。

・ただ単に、偶然が続いただけの事なのか

それとも人為的な火災であつたのか？それは

知り得ないところではある。

・なお、齊明天皇のことを後岡本天皇（伊豫

國風土記逸文湯泉条）と称しているのだから、

このときの火災による被害は小さく、

齊明天皇は焼失部分を修復し、これ以後も

この岡本宮で政治を行なわれたのであろうと察

せられる。

＊